

〔Ⅳ〕 古典Ⅱの教材検討と読解指導の試み

— 小集団活動を通して —

鈴木 洋一郎

はじめに……テーマ設定と

古典Ⅱの学習目標

学習指導要領における古典Ⅱは、従来の古典乙Ⅱとは異なり、古典Ⅰ甲からも古典Ⅰ乙からも進行して学ぶことのできる新設された選択科目であり、全高校生を対象として履修させるという性格をもっている。従って、指導要領の“精選された作品を深く読み味わってその特質がわかるようにする”という目標を達成するためには、生徒の学習態度—古典の接し方の指導が検討されねばならない。

古典Ⅱでは一冊の古典かまたいくつか2～3冊の作品を年間を通して読み親しませることによって、作品の文芸性、思想、社会性更に時代背景や作者の考え方を追求させることも必要であり、生徒の自主的な学習から古典への興味を深めるために、小集団活動による読解指導を試みたのである。

1. 古典Ⅱの教材の検討と特色

古典Ⅱ（古文）の教材を検討すると、最も有名な古典を単行本教材として使用するものと、いくつかの作品を編集して一冊としたものがある。前者には、源氏物語・枕草子・芭蕉・徒然草などがあり、後者には、“和歌抄”として万葉集・古今集・新古今集の和歌を並べたり、“古典文学選”として有名な古典の文章を抜粋収録するものがある。今回の調査は、前者の教材検討に向け、現在本校で使用の源氏物語（芭蕉は紙面の都合省略した）や枕草子、徒然草、平家物語など古典Ⅱ教科書について考えてみた。

（一）源氏物語（出版社9は末尾の注）（表Ⅰ）

区分	巻名		教材数	出版社	
青春時代	1	桐壺	9	K	
	2	帚木	1		
	4	夕顔	4		
	5	若紫	9		
	6	末摘花	1		
	7	紅葉賀	2		
	9	葵	1		
	10	賢木	1		
			雨夜の品定		1
			雪夜の訪れ		1
		聖代の饗宴	2		
		車争い	1		
		野の宮	1		

区分	巻名		教材数	出版社
流転	12	須磨	9	
	13	明石	3	
栄華時代	19	薄雲	4	H, K
	21	乙女	2	
	22	玉鬘	3	
	25	萤	2	
	28	野分	1	
	29	行幸	1	
33	藤裏葉	2	I, J	
晩年	34	若菜上	3	B, E
	35	”下	3	
	36	柏木	2	
	40	御法	4	
	41	幻	3	
宇治の世界	45	橋姫	3	B
	47	総角	1	
	49	宿木	1	
	50	東屋	1	
	51	浮舟	7	
	53	手習	2	
54	夢浮橋	4	E, K	
		大君の死	1	F
		中君と薫	1	G
		中君と浮舟	1	

（二）枕草子

◎ 採用頻度数の多い教材

（表Ⅱ）

採用度数	段（三巻本）			
8	1			
7	25	319		
6	23	82	182	
5	37	223	240	
4	3	9	28	43
	106	130	262	268
3	5	8	41	42
	67	75	101	102
	143	151	166	178
	195	226	267	269
	299			

◎ 採用頻度の少ない教材 (表Ⅲ)

出版社	採用教材数	他の教科書には不採用の段			一編の採用率
A	18	2 17 117	10 83 129	14 84	44
B	26	11	29	250	11
C	24	4	160	224	13
D	22	31 298	119	133	18
E	25	95	275		8
F	26	24 79 253	27 108 255	78 252 301	35
G	27	44 175 228	131 177 230	132 179	30
H	18	33 64 306	38 133	62 212	39
J	25	137			8

≡ 徒然草

◎ 採用頻度数の多い教材 (表Ⅳ)

調査した5社(B, F, I, J, L)の中で、4教科書に採用されている文章は次の20編である。

段	文 章
序	つれづれなるままに…
1	いでや、この世に生れては…
7	あだし野の露きゆる時なく
10	家居のつきつきしく…
12	同じ心ならん人と
19	折節の移りかはるこそ…
25	飛鳥川の淵瀬…
30	人の亡きあとばかり悲しきは…
37	朝夕へだてなく馴れたる人の…
39	或人、法然上人に…
56	久しくへだたりて逢ひたる人の
71	名を聞くより、やがて面影は…
73	世に語り伝ふる事…
84	法頭三蔵の、天竺に渡りて…
85	人の心すなほならねば…
89	奥山に、猫またといふもの…
167	一道に携はる人の…
215	平宣時朝臣…
234	人の物を問ひたるに…
243	八つになりし年…

古典Ⅱ教材の検討結果について

(一) 源氏物語

源氏物語の検討(表Ⅰ)からわかることは、

主人公光源氏の出生に始まる桐壺の巻は、作品の構成上、どの教材においても必ず採用されており、次いで若紫の巻の青春のロマン、須磨流謫の流転の巻々、更に、驕りをもつ晩年と宇治十帖の文章などがあげられるが、一代の栄華を極める部分が意外に少ないことが注目される。また夕顔、玉髪のような所謂玉鬘系の挿話や帚木の品定めや螢巻の物語論も少ない。

これらの中で二編以上、比較的多く採用されている文章は、いずれも次のように周知のものである。

- なにかしの院(夕顔) 小紫垣(若紫)
- 心づくしの秋(須磨) 萩のうは露(御法)

また調査した教材には(L社のように)異色の編集をしたものもあった。それは光源氏を主人公としないで<夕霧>を中心としてまとめたもので、現在の高校生とほぼ同年令の若人が当時どのような人生経験をし、どのような考え方、悩みをしたかを読みとりながら、古典への興味をもたせようとしたので、編集の趣旨には注目してもよい。これは次のように、四つのテーマから成立していた。

- 1.誕生から母の死 (葵)
- 2.元服と教育 (乙女)
- 3.雲居雁との恋愛 (〃)
- 4.結婚と栄進 (藤裏葉)

次に、教材文章の順序、配列を考えてみると、

- 1.表題として巻の名のみのもの……E, F
- 2.三部に分けて、巻の名を書く……B
- 3.二部(本編と宇治十帖)に分け表題…G
- 4.大単元と表題の小単元……C, K
- 5.表題のみ書いたもの……H, I, J

古典Ⅱの教材の取扱いを考えた場合は、単に巻々の名まえ中心で配列するよりも、表題によって内容が考えられるものの方がよいと思われる。

終わりに、教材への**注解**であるが、文章の難解さから考え、生徒の学力からみて更に親切に多くの注解を加える必要がある。また主語の省略で理解に苦しむところも少なくないので、<日本古典文学大系>のように、本文に()の中に主語を加え、読みながら学びやすいように工夫することも、大切であろう。

(二) 枕草子

(表Ⅱ)の段数はすべて三巻本のものに従った。検討中の教材には、伝能因本によったものも二冊あったが、すべて三巻本の段と校訂しながら考えた。

4教科書に載っていて、採用数の多い段と冒頭の文は次のようである。

1 段	春はあけぼの
25	すさまじきもの
319	この草子、目に見え…
23	清涼殿の丑寅の一部(古今の草子を…)
82	頭の中將のすずろなるそらごと…
182	村上の前帝の御時に
37	木の花は
223	五月ばかり山里にあゆく
240	御乳母の大輔の命婦

(表Ⅲ)にある採用数の一編のみ採録されている文章をまとめると、9冊を通して45編あった。枕草子の古典としての価値や教材としての評価は一応定着してはいるが、今後はこれらの中から新教材を発掘するような態度があってよいと思う。次の三社は採用教材の三分の一以上が、その社独自のものであり、教材発掘に積極性があるものとして注目ができる。

A社は採用教材18段中の44%

F社は “ 26段中の35%

H社は “ 18段中の39%

次に教材の順序配列であるが、一般には〈段〉を追うて並べてあるが、A社のように前後二部に分けて、第一部を類集段、随想段とし、第二部を回想段とし、C社のように、単元を設けて次のように分けているがこの古典の特色を具体的にとらえ、生徒の理解を助けるものと言ってよい。

1. 季節の感触……………9編の文章
2. 美の心象 6 “
3. 宮仕の日記 8 “
4. おりおりの想い 6 “

㊦ 徒然草

(表Ⅳ)にある採用数の多い文章は、いずれも作品中有名なもので、古典Ⅰ甲、Ⅰ乙で既に学習済みのものが多い。古典Ⅱの学習目標から考えて、重複しないように教材への配慮が望まれる。そして作者の人生観趣味観を読みとりながら、随筆文学の真価—古典の発見—がわかるような教材と指導が必要であろう。

㊧ 平家物語

3教科書(B, C, K)について調べてみると、祇園精舎、殿上閣討、橋合戦、月見、小督、入道死去、維盛都落、大原御幸などの文章が多かった。平家物語も徒然草とともに、古典Ⅰ甲、Ⅰ乙でも使用される教材であり、源氏物語とちがいで、登場人物はほぼ実名で、特に合戦物などについて写実的でわかりやすくまたおもしろいものが多い。種々の系統本はあるにしても、琵琶法師の演奏による語りものであるから、俗耳に入りやすかったし、この点からも理解しやすいものである。従って古典Ⅱの教材構成においては、古典Ⅰの教

材とは異なる意図でその配列を考える必要がある。この点、前述の徒然草と同様に編集に当り、十分の創意と工夫が加えられなければならない。

2. 古典Ⅱの読解指導の試み

この本論—指導の試み—にはいる前に、現行の古典Ⅱの教材について検討をしたが、教師が学習指導に工夫をしても、教材の内容いかんによっては、その効果が挙がらないこともある。

次に、読解指導の試みとして小集団活動を取りあげた動機は、昨年のある研究会の席上、生徒の古典に対する姿勢として次のような発表があったことである。それは、高校では過半数の52%の生徒が教師の解説、説明の中心授業の形態を希望し、生徒の発表を主とする授業形態を望むものは、少数の3%であるということであった。(全国付連高校国語部会)

以上の発表を参考として、古典Ⅱの〈古典を深く味わって読む〉換言すれば〈じっくり読む〉というのは、単に教師の解説、説明に従うのではなく、数人集まって協力しながら調べ、話し合った結果を分担に従って発表し、それに対して質疑討論するという主体的学習の中から生れてくるものと予想した。

また本校の古典Ⅱの前半の教材として用いた源氏物語は、参考書などの学習資料も多いので比較的入手しやすいし、高2の古典Ⅰ乙で、若紫の文を習った直後だけに、ある程度の予備知識と物語文への慣れと興味があったことは好都合であった。

㊨ 教材の内容

古典Ⅱ(古文)で使用している教材は、三省堂の源氏物語である。それは、源氏の出生に始まり紫の上を知りまた明石の上を知り、両者の間に立って、生きる主人公の悲しみ、悩みなど精神的葛藤を通しての人間成長を描きそして紫の上の死まで書かれている。短期間の学習であるので、玉鬘系の物語や宇治十帖は省略され、上記の三人をめぐる人間模様としてまとめられている。この教材の単元は次のようである。

1. 光源氏の物語 (桐壺, 若紫)
2. 明石の上の物語 (須磨, 明石, 松風, 薄雲)
3. 紫の上の物語 (若菜上, 御法, 幻)

古典Ⅰ乙で基礎的な古典に接し、一通り文法の力を身につけた高3の生徒には適当な教材である。実際は文科系、理科系と科目を選択させて授業する時間の多い学年であるから、全生徒に共通にこの古典を学習させ、特に理科系のものに興味をもたせる指導は容易ではない。それで、クラスを次のように小集団(グループ)に分けて、それぞれに目標、学習範囲、分担等を示し、全員が常時多少なりとも学習活動に参加して、成果を挙げようと試みたのである。

(二) 小集団(グループ)の編成

1. 人数 9人単位の5グループ

A, B, C組とも45名なので、この編成は容易である。そして1グループが発表のときは、他の4グループは質問グループとなり、それぞれの分担に従って討論に参加する。

2. 役割・分担

リーダー(司会)を選び、4つの係りを2人ずつで分担、また毎時記録者を定め、グループの活動を別紙A形式に記入して提出、評価をうける。リーダー及び各係の役割は次の通り、

リーダー(司会)

発表(または質問)の分担、方法を定める。グループの準備(予習)進行について注意。記録者を毎時指名する。

グループ発表活動の司会、及び発表の補助。

朗読の係

本文を朗読する。

前時までの筋、また今時朗読した部分のあらすじを説明する。

文法・語句の係

文法 特に助動詞、省略されている主語、敬語法などをとり挙げて説明する。

重要語句の解釈説明をする。

文章解釈の係

全文口語訳、今までのグループの係りの説明を生かして解釈をする。

問題点指摘の係

文章中問題となる重要個所を指摘して解説。表現上の特色、登場人物の心理など文章鑑賞についても触れ、下欄の問題の解説をする。

3. 発表グループの交代

発表は3時間単位で、順次交代し質問グループとなる。

(三) グループの指導 A.発表グループの場合

1. 朗読の係に対して、

物語文学における朗読(語り)の重要性を確信させ、朗読した部分のあらすじを簡潔に述べさせる。古文のリズムに慣れるように努力し、読みまとめた結果をわかりやすく発表するのがポイントである。

2. 文法、語句の係に対して、

上述の助動詞、省略主語、敬語法については文章解釈上特に必要なものに限り説明させる。この際必ず口語訳を確実にさせ、品詞分析の説明だけにならぬように注意する。

教科書の下注にない語句の解釈、及び有職故実を始め平安時代独特の用語について冗長にな

らぬよう指導し、次の全文訳に活かされるようにする。

3. 文章解釈の係に対して、

朗読、文法語句の活動の総括として、解釈(全文訳)をさせる。あらすじの発表や文法の説明などを十分に活かして訳し、次の2点に特に注意させる。

1.一語一句を確実に把握して訳す。

2.流暢な訳文を要求しない。従って所謂“ガイド”なる学習参考書の訳は避ける。

4. 問題点指摘の係に対して、

教科書の下欄や後出の問題について解説するとともに

1. “なぜ謙譲語を用いているか”などの敬語法の補説をしたり、

2.主人公の動作に表われた心理の追求、

3.文章の表現のうまさ、

などについても述べ、更にグループ内で話し合った二、三の問題を他のグループへ提示するようにもさせる。

(四) グループの指導 B.質問グループの場合

4つの質問グループは、発表グループの活動後に一斉にそれぞれの係りが分担により質問するようにする。

教師は発表のまとめやとり上げ方や質問の仕方について指導する他に、質問へ適当な応答ができない事項の解説や生徒の発表後の補説をする。

(五) 学習指導の実際

授業の経過は教材の内容や発表グループの巧拙によって一様ではないが、大体次の表のようなパターンによって指導を進めた。

グループの活動		指導
発表	質問	
リーダー きょうの予定 発表者紹介 発表後の補説 と質問		○補説を求める ○質問をうながす ○ヒントを与える
朗・読 朗 読 あらすじ (他の一名は) 板書する	○朗読のしかた 誤読の指摘 あらすじのま とめ方につい ての疑問	○発表グループの 答の補説
文法、語句 三項目につい て説明 重要語句の訳	○文法において解 説が口語訳に活 かされているか。 ○重要語句選択の 洩れたもの、解 釈の不明なもの。	○文法総括の口語 訳の指導 ○特に質問する ○質問に答えられ ないときは解説

グループの活動		指導
発表	質問	
文章解釈 グループで話し まとまった 口語訳 問題点指摘 文章中の重要 個所や設問の 研究 文章の鑑賞	解釈に疑問、不 明な点について 発表グループと は別個の問題を 探究、指摘する	○今後の発表、質問 グループの活動 について自己評 価をさせる。 ○教室内の席次、 活動しやすいよ うに注意。 プリント、板書 などの発表の仕 方を指導する。

（六）活動の記録

発表、質問それぞれのグループは毎時の活動の記録を次の授業後に提出させた。記録の形式は、(別紙A) のようであるが、これは、最初一か月の記録ノートを反省し、その後訂正したものである。この記録は4月下旬から7月まで継続したが次のようである。

○発表グループの記録について

概して質問の4グループの記録に比べて詳細、ていねいであった。

- 1.発表者の活動は授業の展開に従って書かれ、教師の指導についても記録している。
- 2.それぞれの係の発表内容について具体的に記入している。
- 3.活動後の感想については、朗読では発声、音量速さへの注意が目立ち、「演劇部だからよい」「声がやや小さい」「はっきりしない」などの寸評もある。文法では説明のミス、主語の補充をていねいに、解釈に余り関係の少ない品詞論の説明はやめること要望し、解釈では、準備周到な発表への賞賛がある反面、「りっぱすぎてちょっとたよりない」とか「原文を見ずに訳文を読んでしまった」「発表に黒板を利用しているのはよい」というものもあった。

○質問グループの記録について

一般に記録は不十分であった。これは指導が徹底しなかったためであると反省しているが、特に発表グループが交代直後のものはわかった。グループ内の話し合う特設の時間もなかったためでもある。発表グループのリーダーが逆に質問グループに質問して活動の活発化を誘発する手段をとることもしばしばあった。

○活動に対する希望事項…記録から列記すると、

- 1.欠席した場合、代理が発表できるようにする。
- 2.記録者欠席のときも同様
- 3.リーダーはグループ内での事前に打合せを周到

にして、教壇上からまたは質問グループとも対面して自信をもって運営にあたれ、

- 4.文法には語釈を忘れずに、
- 5.問題点の指摘をていねいに、文章を通して主人公の性格、心理探求を明らかにしてほしい。
- 6.発表のテンポをおそくしてほしい。

3. 指導の評価

グループ活動終了後、(別紙B)のアンケートに従い、教師の指導に対する反応、生徒の感想、希望などを記入させた。その結果をまとめると、

(一) 使用教材について

A 教材の配列、構成

過半数のものが普通であるとし、よいまたはあまりよくないとするものがそれぞれ、20%弱 大変よいとしたものが、10%

B 教材の追加(補助教材の希望)

人物としては、末摘花が最も多く10%、次いで夕霧の5%で、空蝉、柏木、朧月夜内待、薫などに興味を示している。

宇治十帖まではあげる人物はなかった。

ことがらとしては<蓬生>の女主人公の生活、源氏と藤壺との出会い、雨夜の品定め、紫の上の心理描写、源氏の死などに関心があった。

(二) 文章、語句の難易

区分	はい	いいえ	不明
A	117	18	6
B	33	75	27
C	3	105	27

なお語句については終始難解としたもの多い。

(三) 文法の難易

助動詞…比較的取り扱いになれていて、難しい問題とはなっていない。生徒は品詞論的な説明は機械的にできるが、解釈への適用—口語文に直したのを見ると、説明通りにはなっていない。説明と訳との不一致が目立った。

省略主語の発見 難しいとしたもの15%

文章前後の関係を押えていないのでわからないとか、述語の部分から人物の心を読みとるのがむずかしい。

敬語法の解釈への適用 最も難しく40%

誰から誰へという人間関係がわからない。口語訳はあまり使用されない。聞き慣れない。謙譲の意味がはっきりと言い表せない。

(四) グループ活動

A.会合は2回~5回が多い。(授業時に2回特設

したのだから、それ以外の会合はもたなかったグループもある)

- B. 分担、大部分交代している。係の負担は平等にする。リーダーの重任は避けるのがよい。
- C. Dの発表、質問については一般に不十分であるという反省が多い。
- E. 特記すべきものはなかった。
- F. リーダーはもっと自信をもって強気にやれ、全体をしっかりとまとめ時には壇上から呼びかけることがあってもよい。
- G. 口語訳について……訳文を全部うっして早口に言うてしまう。2回繰り返して言え、訳文を読むだけでなく原文に即した訳を、ポイントを押えてゆっくりわかりやすく訳せ、難解の部分や裏の意味のあるところに力点をおけ、導入に当っては前時の部分の復習をしっかりとしておく、などがある。
- H. 資料……所謂“ガイド”“リーダー”なるものを安易に利用してしまった反省などがあったが、中には湖月抄、古典文学大系本 谷崎源氏や與謝野源氏の訳を利用したり、源氏物語の参考書を資料にしたものも多かった。

(四) グループ活動の終りに

- A. 読解力について まだ不十分であった。
辞典を利用して語彙力を増すとか、全訳を自分でまず考えてみようという予習の態度、そして授業に対して消極的であったこと反省の点が書かれている。しかし、以前よりは態度もよくなり、物語の感じが多少わかるようになった。また古語の知識、敬語の用法もわかり、助動詞の意味・接続・用法も正確に把握できた。
- B. グループ活動への参加
予習していないときでも、個人的には努力したとか、予習してわかっていると質問はしなくなる。また、グループ内の非協力—相互に協力しない雰囲気でも消極的になりそのために質問が中休み状態になってしまうとするものもある。
- C. 古典への興味
教科書記載の文章以外のものを読んでみたいと

いうものが15%もあった。しかし多くは口語訳、現代語訳という注がついていた。また平家物語のような他の古典へ興味を示したものもあった。また今は時間的な余裕はない、それにむずかしいのでどうしても訳を先に見てしまうとか、人物関係が複雑で興味がわからないとするものもあった。

おわりに

いままでの指導の過程や記録を見て、更に終了時のアンケートを通して感じられるものは、まず生徒は全体的によく予習をしていたということである。この予習の方法や資料の利用などについては若干問題はあがあるが、個人のノートには予習の跡があり、多数が積極的に学習するようになったことは一つの成果であった。

次に古典学習の態度が理解させた。朗読による全体の把握(あらすじの発表)、全体把握から細部への探求(語句、文法)文章解釈による正確な理解(口語訳)そして最後に問題点指摘による内容の深化(鑑賞から批評)という四段階学習の手順をわからせた。

更に自主的な学習によって古典への興味を呼びおこしたということである。教師の一方的な講義や順番制による生徒の解釈によらず、グループの討議、協力によりそれぞれの分担に従い発表する責任制の学習は、発表グループにも、質問グループにも双方にプラスになるものがあった。その発表と質問とそして指導にゼミ方式を採り入れたので、生徒の積極的な発表の態度は古典への興味の契機となった。しかし古典Ⅱのグループ活動による学習指導は初めての試みであり、十分に目標や方法を検討せず実施してきた傾向もあることを反省し、次年度にはこれらの点を十分考慮して成果あるものをめざしたいと思っている。大方の叱正をいただければ幸いである。

<注>教科書会社の略号は次の通り

- A…教育出版 B…筑摩書房 C…三省堂 E…東京書籍 F…旺文社 G…右文書院 H…光村 I…尚学 J…明治書院 K…第一学習 L…角川

古典Ⅱの教材検討とその読解指導の試み

(別紙A)

No. ()

No. ()

「源氏物語」グループ記録 月 日()曜 第()時限 第()班 記録者氏名 ()				他のグループへの活動		
				項目	質問者	質問の内容
グ ル ー プ 独 自 の 発 表	発表者	発表内容：活動	感想			
					調査諸資料	
					評価	自己
				希望事項		

(別紙B)

高三 グループ活動のアンケート

一、教材(作品)の構成 ～教科書を見ながら～

A 教材の構成 配列の順序

ア. 大変よい イ. よい ウ. 普通 エ. あまりよくない

B 教材の追加……補助教材として追加するものがあれば

ア. どの人物のもの

イ. どんなことから わかるものがあつたら書け

※注……今まで学習した教材(源氏物語)は次のようである

○いずれの御時……光源氏の出生と幼年時代

○北山の春……若紫との出会いと明石の上への伏線

○明石の上の物語…… 1. すま・明石での明石の上との出会い

2. 上京して明石の姫をめぐる人間模様

二、文章・語句の難易 ア. はい イ. いいえ ウ. 不明

次のABCの項目について(ア. イ. ウの)記号で書け。

A 前(一学期の初め)・後(二学期の現在も)むずかしい

B 前はやや易しいが後半はむずかしい

C 前半はややむずかしいが、後半からやさしい

三、文法の難易 助動詞・省略主語の発見・敬語法の解釈への適用について学習したが、その中から最も難しかったもの一つについて書け。

四、グループ活動

A グループ独自の会合をもったか? 何回ぐらいか?

B 自分担当 一回目 二回目 一, 二回とも

C 分担についての準備は十分だったか?

D 発表についての評価 a よくわからせたと思うか?

b 他からの質問はあったか?

E 他のグループの発表

グループ内の協力や準備が十分で、よくわかった班・内容

F グループ司会(まとめ)に対しての要望

G 口語訳についての要望

H ノート・資料・参考書の利用についての反省

五、グループ活動の終りに

A 発表(訳)などはスムーズに進んだが、古文を読み・わかる力がついてきたか?

B 他のグループの発表に対して積極的参加(質問)は十分であったか?

C 古典への興味

一冊の古典をおちついてゆっくり読み、鑑賞しようとする態度が身についたか?